

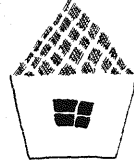
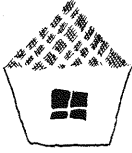
巻頭言

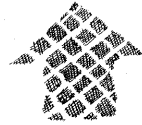
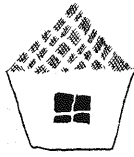
絵本と子どもを見つづけて

佐々木 宏子

読者論の立場から

乳幼児が絵本を読むことの意味について研究したり考えたりしてから、三十年以上の月日が経ちました。最初はごく身近な乳幼児を丹念に観察し、子ども達がどのような時期から絵本に微笑みかけるのか、また、知っているものの認知や命名、感情の発、ひいては言葉や描画、遊びへと相互作用をしつづどのように影響を与えるものなのかを分析してきました。当時は「赤ちゃんに絵本を読ませるなんて」という批判が、かなりあったことも事実です。このような私の研究の視点は、いつの頃からか児





童文学研究者の間で「読者論」の立場とよばれるようになっておりました。今でこそ「赤ちゃんと絵本」は、ごくあたり前のように論じられており、隔世の感がします。「読者論」の立場を引き受けてきて言えることは、子ども達に「良い絵本」や「ふさわしい絵本」は、本当に多様で個々バラバラだということです。読み手との関係、子どもの性格、生育史などにより子どもの絵本への興味は異なり、絵本の選択肢が増えれば増えるほど、私はそこに新しい「子ども」を発見しつづけてきました。

絵本と子育て支援

私が勤務する鳴門教育大学に、地域に開かれた児童図書室を創設したのは、一九八七年の春のことでした。それ以来、本を読む親子の姿はいつも私の周りにありました。最近では、赤ちゃんをつれたお母さんも数多くなりました。生まれて一か月も満たないうちにお母さんと一緒にやって来て、「図書館デビュー」を果たしたお子さんもいます。これは、お母さんが赤ちゃんに絵本を見せようとして連れて来られたのではなく、赤ちゃん連れで受け入れられる数少ない公共の文化施設として、この児童図書室を選ばれたということです。学生達は、妊娠中のお母さんから出産・育児と目の当たりにし、一人の赤ちゃんが育つてゆく過程をつぶさに共有できるようになりました。誕生し歩き、今では走るようになって一人の子どもの姿を追いつつ、絵本が一組の家族の中でどのような役割を果たしてゆくのか、興味深いエピソード

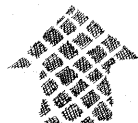
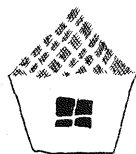
ドが沢山あります。

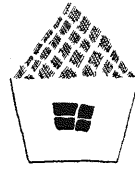
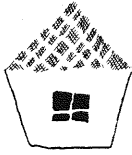
読み聞かせは読書への入り口か？

数多くの絵本を読む子ども達とのお付き合いのなかで、「乳幼児期の読み聞かせは子どもの自立した読書への入り口」という、一見何の疑いもないような言い方に、最近ではあまり説得力を感じなくなりました。もちろん、子どもによっては、そのような将来の読書好きにつながるような「読み聞かせ」経験もあります。しかし、乳幼児期の絵本の存在は、「玩具やテレビ、コンピュータゲームなどと同じような文化的環境の一つです。早くから飛行機の玩具を与えれば、将来パイロットに育つたり、早くからおままごとセットで遊べば家事が上手な子どもになるわけでもありません。それと同じように絵本も多様な文化財の一つなのです。

もちろん、絵本は読み手であるおとなとの人間的な交流を必要としますので、読み合いを通して子どもに深い満足感と楽しみを与えます。結果として、前述したような他の玩具よりも言葉や感情の発達を促すこともあります。しかし、言葉や想像性の発達のごっこ遊びを通してもずいぶん育ちます。

乳幼児期の絵本の読みは、まだ確かな自己と重ね合わせるような強い意味をもってあるわけではありません。自分の生き方にも深い影響を及ぼすような本格的な読書は、一般的には子どものなかに明確な自己が完成し、自らの生き方と重ね合わせるこ





とが可能になる小学校の中学年頃からではないでしょうか。絵本は無性に楽しい時もあれば、単なる暇つぶし、おとなを引き留める手だてになる場合もあります。絵本と子どもの関係は、おとなと読書の関係と同じで様々だということです。

親を育てる絵本の読み聞かせ

子どもに絵本を読み聞かせる時の物理的な姿勢ですが、おとなが子どもを膝に抱き絵本を前に一方向に並ぶやり方は、子どもが幼ければ幼いほどあまり意味がないと思います。なぜならば、読み合うということはお互いが読みを分け合うということです。から、お互いの表情が見えなければ価値が半減するのです。絵本の読み聞かせというと、ごく当たりまえのように「子どもに何をもたらすか」という視点をとりがちです。しかし、私は最近、論理を逆転させ「おとなに何をもたらすか」に興味が移りつつあります。

読み聞かせのとき、絵本のリズムや物語の起伏にあわせて子どもの表情を確かめ、共鳴する読み手もあれば、まるで無表情な人もいます。

あるお父さんは、言葉のリズムにあわせてトントンと子どもの手を握り、身体を揺ります。その一連の動きと流れは、とても美しく見えます。あるお母さんは、絵本だけを淡々と静かに読み、子どもの表情への興味はまるでないように見えます。今しばらくは、このような読み手の表情を見つづけたと思います。

(鳴門教育大学)